

パレスチナの昨日、今日、明日

—歴史からイスラエルを捉えなおす—

2024年1月29日 長池公園自然館

よくある誤解

- ・ パレスチナ紛争は宗教戦争だ
- ・ ユダヤとアラブの民族間対立である
- ・ ここは元々ユダヤ人が住んでいた土地
- ・ イスラエルには自国をまもる権利がある
- ・ どっちもどっち

I ユダヤ人とイスラエル

パレスチナはどこか？【図1】

ユダヤ人とは？

- ・ 民族とは言語・人種・文化・歴史的運命を共有し、同族意識によって結ばれた人々の集団
- ・ ユダヤ教の信者（宗教集団）またはユダヤ教信者を親に持つ者によって構成される宗教信者
- ・ 祖先はペルシャ湾に近いウルに住んでいた【図2】

カナン

- ・ 地中海とヨルダン川・死海に挟まれた地域の古代の地名【図3】
- ・ 地名の由来は諸説ある
- ・ 旧約聖書で「乳と蜜の流れる場所」と描かれ、神がアブラハムとその子孫に与えると約束した土地とされる
- ・ 紀元前11世紀頃、ヤハウエ信仰（ユダヤ教の原型）を国教とする古代イスラエル人が古代イスラエル王国を建国
- ・ カナン人とは紀元前一二〇〇年以前の青銅器時代のレバント諸民族の総称、あるいは諸民族のルーツ

エジプトへの避難と出エジプト

- ・ 紀元前17世紀、飢饉のためエジプトに避難
- ・ ファラオによって奴隷にされる
- ・ 約400年後、預言者モーゼに率いられてエジプトを脱出、カナンに帰る

イスラエル王国

- ・ ユダヤ民族の伝説的な始祖ヤコブが神に与えられた名前にちなむ、紀元前11世紀から紀元前8世紀まで古代イスラエルに存在したとされるユダヤ人の国家【図4】
- ・ 旧約聖書に記述があるだけで、史実としての証拠はほとんどなく、学問的には論争中で、ダビデ、ソロモンという王が存在したかも不明

分裂と滅亡

- ・ 紀元前922年頃、ソロモンの死去により部族の統制が失われ、サマリアを首都とする北のイスラエル王国とエルサレムを首都とする南のユダ王国に分裂【図5】
- ・ 紀元前722年、アッシリアによってイスラエル王国が滅ぼされ、多くの人民がアッシリア捕囚となった
- ・ 紀元前586年、新バビロニアによってユダ王国が滅ぼされ、多くの人民がバビロン捕囚となった
- ・ 紀元前538年に新バビロニア王国がアケメネス朝ペルシアに滅ぼされ、解放されたユダヤ人はエルサレムに帰還

アレクサンダーの帝国とその後

- 紀元前4世紀、マケドニアのアレクサンダーが西はギリシャ、エジプトから東のパキスタンまで征服
- 紀元前323年、アレクサンダーの死によって帝国は分裂し、パレスチナはプトレマイオス朝エジプトに併合される
- 紀元前31年、ローマがエジプトを併合し、パレスチナは属国になった
- ユダヤ王ヘロデの統治時代にイエスが登場
- 紀元前4年にヘロデ王が死に、ローマの属州になった

ローマの支配に対する反乱

- ユダヤ戦争（66～70年）、バル・コホバ蜂起（132～135年）
- 鎮圧されて自治を失い、厳しい民族的弾圧に遭う
- イスラエルという名も廃止され、パレスチナという地名が復活

離散（ディアスポラ）と同化

- 以来ユダヤ人は2000年近く統一した民族集団を持たず、多くの人民がヨーロッパを中心に世界各国へ移住
- 移住者たちは、ユダヤ教徒として宗教的結束を保ちつつ、各地に定着。パレスチナに残ったユダヤ人は、民族としての独自性を失い、アラブ人の支配下でイスラム教徒として同化、現在のパレスチナ人になった

迫害と追放

- キリスト教がローマ帝国の国教になる
- 中世以降のヨーロッパはキリスト教を中心とした社会
- ユダヤ人は「キリスト殺し」の罪を背負い、ムスリムとともに迫害された
- 居住が安定しないユダヤ人にとって、金融業や無店舗の行商、芸能など、職業選択が限られていた
- 1492年、スペインにカトリック王国ができ、改宗しないユダヤ人は追放された

ユダヤ教の孤立と矛盾

- 頑なな一神教（他宗と融和しなかった）
- 選民思想（他民族との共存を難しくした）
- 律法の自己目的化（律法学者が権力を掌握）

三つの宗教の共通点・相違点

	ユダヤ教	キリスト教	イスラム教
神	ヤハウェ		アラー
天使・悪魔	両方存在		
預言者	アブラハム、モーゼ、イザヤ、ダビデ、他	アブラハム、モーゼ、ヨハネ、他	アブラハム、モーゼ、イエス、ムハンマド
聖地	エルサレム		メッカ、メディナ、エルサレム
聖典	旧約聖書	旧約聖書、新約聖書	旧約聖書、新約聖書、コーラン
神話	唯一神による天地創造、アダムとイブ、ノアの方舟、モーゼの出エジプト、他		
終末観	死者も蘇り、最後の審判を経て、善人は天国へ昇り、悪人は地獄へ墜ちる		
礼拝場	シナゴーク	教会	モスク
安息日	土曜	日曜	金曜
偶像崇拜	禁止	禁止 (カトリックと正教は可)	禁止
割礼	する	しない	する
豚食・飲酒	禁止・禁止	可・可	禁止・禁止

II イスラエル建国

フランス革命と産業革命

- ・ フランス領に住む者はみなフランス国民
- ・ 信仰も職業も自由
- ・ 国民は王でなく国に帰属
- ・ 大資本が必要になり、金融・銀行業で成功者が出現
- ・ 勤勉なユダヤ人は様々な分野で活躍
- ・ それが妬みとなって新たな反ユダヤ主義が発生

シオニズムの形成

- ・ 単一民族の国は、ほとんどない
- ・ 少数民族は差別され常に不利益を被る
- ・ 迫害から逃れるには自分たちの国をつくり多数派になるしかない
- ・ 土地なき民に、民なき土地を！⇒パレスチナ入植

第一次世界大戦

- ・ 産業革命に成功した国が資源と市場を求めて植民地獲得競争
- ・ 遅れた国の文明化という大義名分
- ・ オスマン帝国という厄介もの
- ・ 三国同盟（独・奥・伊）vs 三国協商（英・仏・露）

アラブの協力を求めた英国

- ・ メッカの太守ハシム家のフセインに「アラブ人を率いてオスマン帝国に反乱を起こせばアラブ王国の独立と国王即位を認める」と約束《フセイン=マクマホン協定》
- ・ 軍事顧問として派遣され、アラブ全体の利益を説き、アカバ要塞を陥落させ、ダマスカス攻略に導いたのがT.E.ロレンス
- ・ しかし約束は反故にされた

戦費に窮する英国

- ・ ユダヤ財閥ロスチャイルドに「戦費を賄ってくれたらパレスチナにユダヤ人の民族的郷土の建設を認める」旨の書簡を送付《バルフォア宣言》
- ・ オスマン帝国領は戦勝後に英・仏・露で分割する《サイクス=ピコ協定》

サイクス=ピコ協定

- ・ サン・レモ会議（戦勝国によるオスマン帝国の分割）【図6】
- ・ 英はスエズ運河、ペルシャ湾、モスルの油田、仏はシリアとレバノンを手に入れた
- ・ パレスチナは英の委任統治領となる

細分化されるアラブ世界

- ・ 1920年、シリアはハシム家の三男ファイサル国王に立て独立を宣言 ⇐ 仏は認めず武力で追放
- ・ ハシム家の次男アブドラがダマスカス攻略を準備
- ・ 英仏の妥協…アブドラをトランスヨルダンの、ファイサルをイラクの国王とする
- ・ 英はエジプトの独立を（22年）、仏はシリアの自治を（36年）、それぞれ承認
- ・ パレスチナに無制限のユダヤ移民

敗戦国ドイツ

- ・ ベルサイユ条約が強いた①全植民地の放棄、②軍備の制限、③莫大な賠償金
- ・ 猛烈なインフレで経済破綻
- ・ 世界恐慌による失業者増大
- ・ ナチスの台頭…混乱の原因はベルサイユ体制とユダヤ人
- ・ アーリア人の純血をまもるために劣等人種を隔離・抹殺

ポグロムとホロコースト

- ・ ポグロムはスラブ系の言葉で「破滅」「破壊」を意味し、そこからユダヤ人に対する集団的迫害（殺害、略奪、破壊、差別など）を指すようになった
- ・ 19世紀になるとドイツからロシアにかけての広範囲で反ユダヤ暴動（ポグロム）が勃発
- ・ ホロコーストは、ナチス支配下のドイツ国内及びその占領地域で行われた、ユダヤ民族に対する組織的な絶滅政策・大規模殺戮を指すドイツ語

第二次世界大戦

- ・ 1939年、ドイツは全ヨーロッパの支配を目指してポーランドに侵攻
- ・ 英仏が宣戦
- ・ 1940年、日独伊三国軍事同盟
- ・ 1941年、独ソ戦はじまる。真珠湾攻撃
- ・ 米が参戦

ユダヤとアラブ

- ・ ホロコーストが明らかになり、ユダヤ人に同情が集まる
 - ・ 英がアラブ寄りなのは中東油田があるから
 - ・ 新規入植の制限 ⇒ 漂流する難民船
 - ・ 国際世論の高まりと米の支援
 - ・ 1947年、国連がパレスチナの三分割を決定（賛成33、反対13、棄権10）
 - ① ユダヤ国家（56.5%／30%）
 - ② アラブ国家（43%／70%）
 - ③ 国際管理区域エルサレム
- ユダヤ人が購入した土地は6%しかなかった【図7】

内乱とパレスチナ難民の始まり

- ・ 1948年4月9日、エルサレムへの補給路をまもるため、沿線の村を攻撃・破壊。家屋を焼き、女性、子ども、非戦闘員も容赦なく殺害《ナクバ》
- ・ 5月15日、英が撤退
- ・ その前日にベン＝グリオンがイスラエル建国を宣言
- ・ 数ヶ月のうちに70万人以上がパレスチナを脱出して難民に（現在400万人）

Ⅲ 戦乱のパレスチナ

第一次中東戦争

- ・ 英軍の撤退と同時にシリア、レバノン、トランスヨルダン、イラク、エジプトがイスラエルに侵攻
 - ・ 戦線が突破され、旧エルサレム市街も2週間で陥落
- ↓
- 国連による4週間の停戦決議
- ↓
- ・ 武器と義勇兵の到着で戦局一転
 - ・ エジプトを皮切りに各国が停戦

第二次中東戦争《スエズ危機》

- ・ 1952年、エジプトでクーデター
- ・ ナセルがスエズ運河国有化宣言
- ・ 1956年、英仏が武力で奪還を試み、イスラエルも参戦
- ・ 1週間でシナイ半島を制圧するも、国際世論の非難が高まり撤退
- ・ 国連軍が駐留して両国を監視

第三次中東戦争

- エジプトがシナイ半島に軍を集結させ、アカバ湾を封鎖
- 1967年6月5日、イスラエルがエジプトを攻撃
- 国連の停戦決議を受諾し、6月10日に終結 《6日戦争》
- イスラエルの領土が4倍に

パレスチナ解放機構（PLO）の台頭

- 1964年にPLO結成
パレスチナ人が主体となってイスラエルと戦い、パレスチナ国家の樹立を目指そう
- ヨルダンを拠点にゲリラ戦を展開
- 1969年、アラファトが議長に
- 1970年、無秩序状態になったヨルダンがPLOに宣戦
PLOはレバノンに
- 1982年、イスラエルがPLO掃討を理由にレバノン侵攻
キリスト教徒の要請を受け、アラファトらはチュニジアに

第四次中東戦争

- 1973年、エジプトがスエズ運河を横断してシナイ半島に侵攻
- 同時に北からシリアがゴラン高原に侵攻
- スエズ運河を渡ったイスラエル軍が背面から反撃、エジプト軍を孤立させる
- 米が停戦を提案

キャンプ・デービッド合意

1979年、カーター米大統領の仲介により、エジプトのサダト大統領とイスラエルのベギン首相は、

- エジプトはイスラエルの存在を認め、国交を持つ
 - イスラエルはシナイ半島を返還、ガザ地区とヨルダン川西岸のパレスチナ人に自治を認める
- ことに合意した

大変動

1979年 イランでイスラム革命
サダム・フセインがイラク大統領に
ソ連がアフガニスタンに侵攻

1980～88年 イラン・イラク戦争

1987年～ インティファダ

湾岸戦争

1990年8月 イラク軍がクウェートに侵攻
オスマン帝国時代、クウェートはイラク領だった
イスラエルのパレスチナ侵略を容認しながら、イラクのクウェート併合を非難するのは矛盾と主張
↳ PLOはこれを支持

1991年1月 米軍を中心とした多国籍軍が武力行使
イラクはスカッド・ミサイルをイスラエル、サウジアラビアに向けて発射

1991年2月 イラク降伏

オスロ合意

1992年、クリントン米大統領の仲介により、イスラエルのラビン首相とPLOのアラファト議長は、

- PLOはイスラエルの生存権を認め、テロをやめる
- イスラエルはPLOをパレスチナ代表と認める
- ガザとエリコでのパレスチナ人による暫定自治を認める
- 2年後から難民帰還、エルサレムの帰属、入植地の処理などを話し合うことに合意した

和平交渉の頓挫

- 1999年、和平派のバラクが首相に
「ガザ地区とヨルダン川西岸の92%を委譲。エルサレムは分割統治」と譲歩
アラファト議長は妥協せず
- 2000年9月、和平交渉中にリクード党の党首シャロンが武装警官に守られて神殿の丘に足を踏み入れた【図8】
聖域を汚されたと、怒った群衆が投石

第二次インティファダ

- 2001年2月、シャロンが選挙でバラクを破る
- 石を投げるパレスチナ民衆
- 戦車や武装ヘリ、戦闘機の砲弾とミサイルで応戦するイスラエル軍。家をつぶし、オリーブの木を焼き、井戸を埋め、水路を壊し、畑を荒らし、子どもを連れ去る
- ハマスなどの過激派が勢いづく
- テロに対する報復 ⇨ 米も《対テロ戦争》として支持

テロ vs 対テロ戦争…なのか？

- 2001年9月11日「米国中枢同時多発テロ」
シャロン首相は《対テロ戦争》に同調し、ガザ侵攻
- 2003年3月20日 イラク戦争はじまる
- アラブ諸国の支持を得たいブッシュ米大統領は、マフムード・アッバスをパレスチナ自治政府首相に据え、国連、EU、ロシアの協力を仰ぎながら、シャロンとの三人で和平構想を作成

ヨルダン川西岸地区の分離壁

- 1994年に建設開始
- 目的はテロ対策だが…
- 3つのフェンス＋有刺鉄線＋侵入検知システム
- 部分的には堀＋有刺鉄線＋電気フェンス＋警備道路または8mのコンクリート壁
- 監視塔、検問所、自動砲塔（軍事ロボット）
- 総延長708キロメートル（計画）【図9・10】

分離壁の問題点

- グリーンライン（1949年の停戦ライン）上ではなくパレスチナ側
- 実際は入植地を守るためのもの
- パレスチナ人の生活を分断
- ヨルダン川西岸の50%以上が取り込まれる
- 国際司法裁判所が「国際法に違反する不当な差別、重大な人権問題」と表明
- 国連総会でも非難決議

占領地拡大をつづけるイスラエル【図11】

- ・ 占領地の返還を拒否
- ・ さらなる入植と分離壁の建設
- ・ 国連総会の決議、国際司法裁判所の勧告を無視
- ・ パレスチナとの対話は拒否

ハマスという名の過激派

- ・ ハマスがパレスチナを代表しているわけではない
- ・ しかしハマスを支持する者がいる。それはなぜか？
- ・ ハマスの根絶は不可。暴力は若者をハマス等の過激派に駆り立て、新たなハマスを生み出すだけだから

絶対的被害者という言説

- ・ ホロコーストなど、その責任はパレスチナ人民ではなく欧州社会にある
- ・ 誰が絶対的被害者と認定したのか？
- ・ 何をやっても免責されるという誤解
- ・ ホロコースト相対化の危惧

パレスチナ問題？

- ・ これは政治問題である
- ・ 紛争の主たる原因はイスラエル側にある
- ・ 第二次大戦後、領土拡張の戦争は禁じられている
- ・ イスラエルを支持してきた欧米（特に米国）、黙殺してきた国際社会の責任は大
- ・ 正しくは《イスラエル問題》と呼ぶべきである

世界がイスラエルを止められない理由

- ・ 金融を中心にしたユダヤ系財閥の経済力が欧米の政界に対して大きな影響力を有している
- ・ ポグロムやホロコーストという過去をもつ欧州社会はイスラエルに対して遠慮がある
- ・ 米国は1924年の《移民法》で東欧からの移民を禁じた過去がある

暴力の連鎖を止めるために

- ・ あふれるフェイク情報に踊らされない
- ・ 国と民の“ものがたり”と歴史、法、政治を切り離して考える理性を持つ（イスラエルにもそうした人々がいる）
- ・ 国連加盟国が結束し、総会でイスラエルの自重を求める決議をする
- ・ 日本はユダヤ人迫害とは無縁の国として、イスラエルに対し忌憚なく意見をいえる立場にある

民主主義とは多数派が少数派に対しどれだけ譲歩できるかである

参考になる読みもの

①『旧約聖書』

歴史書ではありませんが、ユダヤ民族の世界観や民族意識を知ることができます。

② 阿刀田高、『旧約聖書を知っていますか』、新潮社

物語風、エッセイ風で読みやすく書かれています。

③ シュロモー・サンド、『ユダヤ人の起源』、ちくま学芸文庫

イスラエルの歴史学者によって書かれた学術的なユダヤ人の歴史を知るとともに、イスラエル建国が正当なものであるかがわかります。

図1 パレスチナはどこか



図2 古代の中近東



図3 青銅器時代のカナン

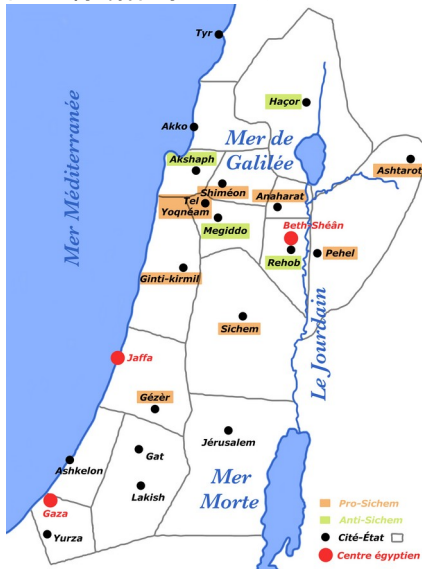


図4 ダビデ王時代のイスラエル



図5 鉄器時代のレバント



図6 サイクス=ピコ協定



図7 国連による三分割

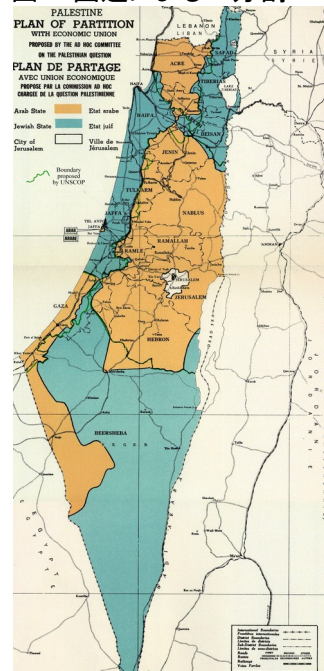


図 8 旧エルサレム市街

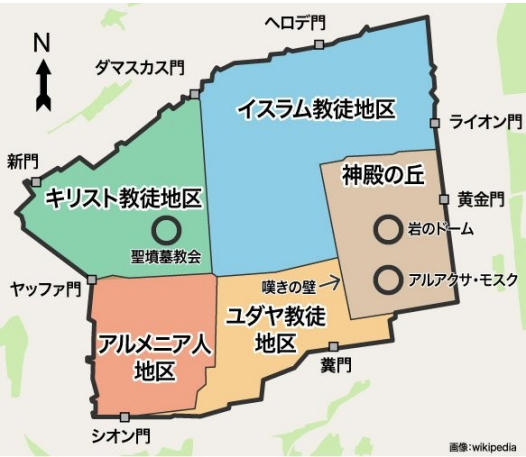


図 9 ヨルダン川西岸地区 封鎖と分断の実態

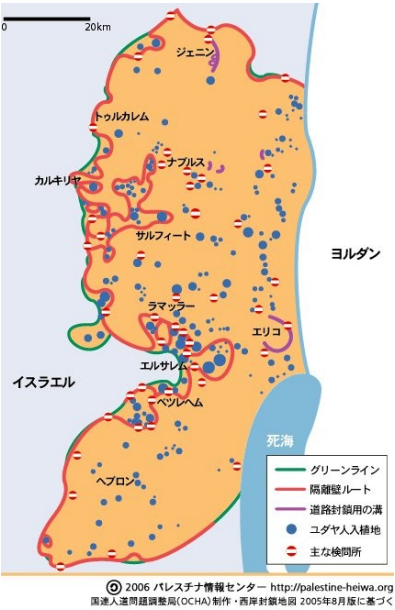


図 10 分離壁のルート



図 11 占領地拡大をつづけるイスラエル

